

はばたき

NO.13



1983.2

神戸市立王子動物園

中国の動物園をみて

私は再度中国を訪問し動物園を見学する機会に恵まれました。

天津市は友好都市であり動物交流についても積極的に親善を深めています。昭和56年には192日間に亘り天津動物園のジャイアントパンダ「蓉蓉」「萋萋」を博覧会に展示し、日中協同飼育と技術交流の画期的な事業を行い、その実効を挙げました。

我が園は昭和41年北京動物園にフンボルトペンギンを贈って以来、中国との動物交流については古い経緯をもっています。本年6月24日は友好都市提携10周年に当り今後も天津動物園との兄弟的友好はさらに深くなり、園相互の発展に大いに役立つと信じています。

天津市は1976年に未曾有の大地震の洗礼を受け、目下都市改造と住宅建設が市政の急務とされています。そうした経済環境の中でも動物園の建設が着々と進められ大きく優先しているのに感心するのです。天津動物園に夢の爬虫類館の実現するのも遠くないと思います。

西安動物園も移転建設の途上にあり、完成間近い類人猿舎の素晴らしいのに驚きました。構想規模から見ても近隣に並ぶ近代的動物園が出来るでしょう。

北京動物園は中国動物園の中核であり動物学の砦としてのみならず行政的役割をもち権威とその実績を挙げていることは周知のとおりです。最近特に野生生物保護についての教育啓発に主力を注いでいるのが印象的でした。

上海動物園も北京動物園と同様世界的動物園として南に冠たる偉容を誇っていて、緑と豊かな樹木に恵まれた広大な園内には当園の半分程もある大きな人工池がありペリカンの親子が雄々と飛翔しているし、野鳥の絶好の宝庫となっています。動物展示も科学的で、奇異に感ずる入口の金魚館は動物進化をアピールする展示法の象徴と考えます。生きた自然史博物館を目指した動物園造りに強い感銘を受けました。社会教育を目的とした学術的にも充実した豪華な掲示板は、そのものが芸術的でもあり、今後私達が大きいに学ぶべき観点です。

どこの動物園でもこれらの掲示板に深く見入りノートしている若い“学究的若者”が多

いのに感心させられました。他にも立派な動物園が沢山あると聞いていますが私が見学したのはこの四園でしたが、それぞれに特色をもっており、その周域の文化の薫りを感じました。

私は中国動物園関係者と園内で、また2回の中国訪問を通して多くの知人をもつことができました。彼等はいつも“研究的”であり何かを学びとろうとする意欲に満ちています。そして彼等は他園に対して讃辞を忘れず謙譲です。他に類をみない動物園をもちながら、また動物に対する深い愛と情熱をもちながら、いつも真摯で謙虚な姿勢に、本当の動物とも生きる動物園人の姿を見たように思います。

神戸市立王子動物園長 山 神 正

も く じ

◆中国の動物園をみて	2
◆速報！中国・天津から	3
新しい動物が仲間入り	
◆ニホンイノシシ 形態と生態	4
◆飼育うらばなし	
●「神ちゃん」にお嫁さんが来ました。	6
●動物園と電気	7
◆おかあさんといっしょ…	8
◆動物育児日記	
●シロカケイ(白火鶏)のひな誕生記	9
●日本で最初のシベリアトラ	10
◆動物なぜなぜ問答	
●チンパンジーやオランウータンの爪は人のように切ってやるのですか？	11
●動物園の助産婦はだーれ？	12
◆動物もの知り手帳	13
◆トピックス	14

表紙写真 コンゴウインコ

(撮影 福田元二)

速報！ 中国・天津から 新しい動物が仲間入り

このたび、神戸市の友好都市である中国の天津市から3種の動物が贈られることになり、2月22日に張煥亭・団長や陳国斌・天津動物園長らによって飛行機で輸送され、王子動物園に無事着き、新しく仲間入りしました。今回、贈られた動物は

レッサーパンダ（学名 *Ailurus fulgens*、中国名・小熊猫）

茶色火鶏（学名 *Crossoptilon mantchuricum*、中国名・褐馬鶏）

青火鶏（学名 *Crossoptilon auritum*、中国名・藍馬鶏）

で、3種とも1対です。

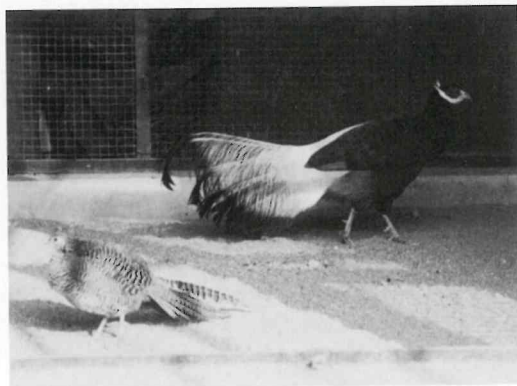
レッサーパンダはアライグマ科に属する茶色のかわいい動物で、有名なジャイアントパンダの親籍に当りやはり笹を食べます。以前から王子動物園に居ますが、メスだったため、こんど、オス・メスの2頭が仲間入りしてにぎやかになり、かわいい赤ちゃんが生まれることも近いことでしょう。今、北極ぐまの南側に新しいレッサーパンダ舎を造っています。小さいながら放し



▲レッサーパンダ

飼いで、3月末にはそちらへ移転します。

茶色火鶏と青火鶏は、中国原産の珍しい“きじ”の一種で、3年前にやはり天津から贈られた白火鶏と同じ仲間です。これで王子動物園では、3種類の火鶏がそろい、新しくなった火鶏舎で展示しています。（橋本昭一）



▲チャイロカケイ



▲アオカケイ

※写真はいずれも、昨年11月天津を訪れた山神園長と三角飼育員が天津動物園で撮影したものです。

ニホンイノシシ 形態と生態



昨年6月、王子動物園に1頭の子イノシシが届けられました。私は、知らぬまに、イノシシの魅力に引かれていき、この時もイノシシの世話をかって出ました。このイノシシは、六甲山系で傷をしていたのを、保護されたもので、傷の状態は門歯2本折れていたのと、後肢にかすり傷がありました。しかし、軽傷であったので、すぐに全快しました。このとき、体重800g、雌で生後1ヶ月ぐらいと思われました。名前は、鳴声から取って“ブイ”と命名しました。こうして、イノシシとのつきあいが始まったわけです。

私とイノシシとのかかわりは、ブイだけでなく、徐々に広がっていき、野生イノシシとの、つきあいをもち始めました。

ここでは、ブイと六甲山のイノシシも含め、ニホンイノシシの形態と生態を中心に紹介していきます。

日本には、地理的亜種である2つの亜種、すなわち、ニホンイノシシ (*Sus scrofa*

leucomystax) とリュウキュウイノシシ (*Sus scrofa riukiuanus*) が生存しています。ニホンイノシシは、本州、淡路島、四国、九州に生息し、特に近畿、中国地方に多く、雪の多い東北地方には少ないようです。リュウキュウイノシシは、奄美大島、沖縄本島、石垣島、西表島に生息し、ニホンイノシシより、やや体が小さいようです。

“ブイ”が当園に来たときには、体にきれいな横縞しまがありました。この時期のイノシシは、うりぼうと呼ばれ、この縞模様は背景によくとけこみ保護色になっています。足も遅く、弱い子イノシシにとっては、大切な防衛手段なのです。私は幾度も六甲山で、母親につれられたうりぼうを見かけましたが、やぶの中に入ってじっとしていると、まったく見わけがつかなくなります。この模様は、生後3ヶ月ぐらいで消えるのですが、成長してもイノシシは茶色っぽい体毛をしているので、これも保護色となっているのでし

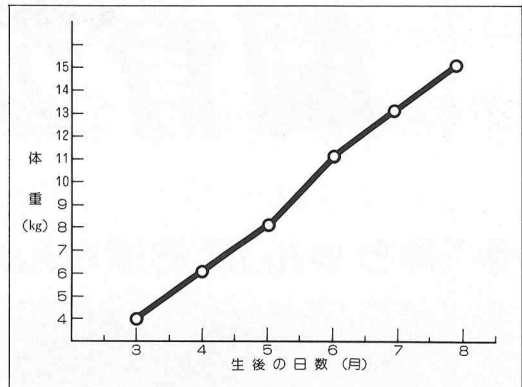
よう。

イノシシが雑食動物であることは、皆さんもよく御存じと思いますが、それが歯によく表われています。イノシシの歯式は、門歯(I)✎、犬歯(C)✎、前臼歯(P)✎、後臼歯(M)✎で合計44本あります。しかし、これだけの歯が生えそろうには、生後3年ぐらいかかります。乳歯の歯式は、門歯(d i)✎、犬歯(d c)✎、前臼歯(d p)✎となっており、前臼歯の1番目と後臼歯には乳歯はありません。生後3ヶ月程で全乳歯が出そろういます。前臼歯はかみ合う面が尖っており、かみ切るのに適しているので、肉食の傾向があるといえます。逆に後臼歯は、平らたくて、すりつぶすのに適しています。このようにイノシシの歯は、草食動物、肉食動物両方の特徴を備えており、雑食をするのに適しているのがよくわかります。

雑食動物というのは、何でも食べられるから、それだけ成長するのも早いようです。グラフは、“ブイ”の体重の増加を示しているのですが、1カ月で約2kgずつ増えていることになり。そして、1年～1年半で大人になります。

イノシシは夜行性の動物といわれますが、六甲山の様に禁猟区で、餌の豊富な所では、昼間でも活動しているのをよく見かけます。

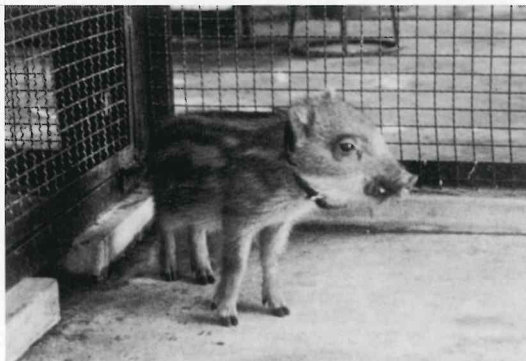
私は数回、六甲山にテントを張って、夜間のイノシシの生活を見ましたが、真夜中にはほとんど活動せず、夜でも主に6時～8時頃が多かったようです。夜行性とは言っても、条件



によって変化し、主に夕方活動するように思われます。

イノシシは、母系集団といってメスを中心に群れを作り、オスは単独で生活しています。このようなオスも、年1～2回は、群れに入ります。これは交尾のためで、主に12～1月に多いようです。出産は春が多く、4～5月頃で3～4頭の子づれのイノシシをよく見かけます。しかし、8～9月頃にも幼い子供をつれたイノシシを見ることがあるので、出産は春と秋、年2回あるようです。

私がイノシシの飼育をして感じたことは、イノシシという動物は、臆病である反面、人間になれやすく、しかも賢くて、かわいいということです。しかし、そんなイノシシが近年農作物を荒らすという理由で、殺され始めています。私としては、このような愛すべき動物が次々と殺されていくのは残念でなりません。皆さんはどう思われるでしょうか？ (兼光秀泰)



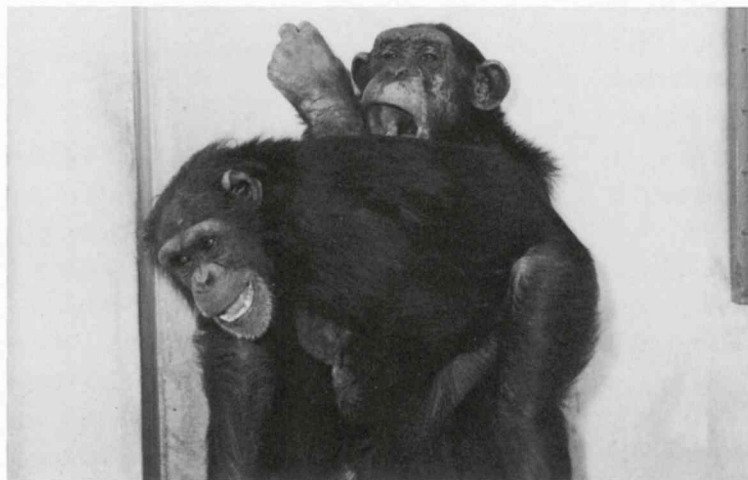
▲生後約2カ月のうりぼう



▲生後約6カ月

飼育うらばなし

◆「神ちゃん」にお嫁さんが来ました。



▲仲の良い神ちゃん(うしろ)と秋ちゃん

母親が死亡したため人工飼育したチンパンジーの神ちゃん(8才、体重62kg)にお嫁さん「秋ちゃん」が昨年の11月2日にきました。

しばらくは見合飼育するはずでしたが、秋ちゃんは移動オリから出るなり、キャーと泣きながら格子越しに神ちゃんに抱きつき、じっとしてしまいました。もう見合の必要がありません。

その夜から2頭は高い寝棚の上に麻袋を敷き眠りましたが、少し離れて眠っていることで安心しました。

ピッタリ寄り添って眠るのは、母親と子供で、おとなのチンパンジーは必ずオスもメスも少し離れたところ(1~2m)に寝床を作っています。それは野生でも動物園でも同じなのです。

若い2頭は一日中ころがったり、ブランコ遊びをやっていますが、バナナを丸かじりする秋ちゃんはジュースを容器で飲むことを知りません。上手に飲む神ちゃんの顔にくっつけるように見えますが、そんな秋ちゃんは時折りお尻を神ちゃんに向けてはグルーミングやマウント

をさそっているのです。神ちゃんもまた次第に秋ちゃんのお尻に興味を示し後ろから抱きついています。

ところで秋ちゃんは到着時より、ずい分と肥ってききましたが、まだ月経も性皮の腫脹(お尻の腫れ)も見られません。

目下この神ちゃんたちの性行動の出現を心待ちにしているところです。

なお、これで王子動物園のチンパンジーは、ジョニ

ー(オス34才)、ユキ(メス17才)、ポピア(メス3才)、チェリー(メス18才)、金(オス17才)神(オス8才)、秋(メス7才)、リリー(メス28才)の8頭になりました。(亀井一成)



▲神ちゃん(上)、秋ちゃん(下)

◆動物園と電気

動物園の動物たちの生命を支えているのは、飼育係の人たちの動物に対する愛情と新鮮な水と空気、王子の森の緑、……そして、電気のエネルギーではないでしょうか？

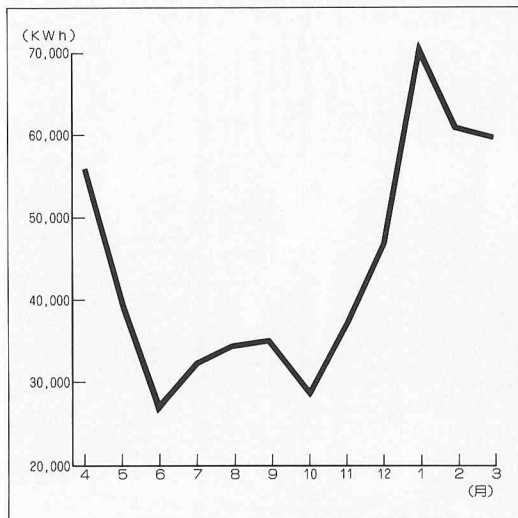
電気がなぜ？と疑問に思われる方もいらっしゃると思います。

動物園の動物たちは、世界のいろんな国から集まって来ています。熱帯から北極・南極まで、その生息地域は広範囲であり、これらの動物が温帯の神戸で快適に暮らし、子供を産み、育てることができるように季節に応じて冷房や暖房をしてあげなければなりません。

ゴリラなどの類人猿や、ワニ、ニシキヘビなどは熱帯地方の動物で、大変寒がりです。暖房の方法としては赤外線ランプによる簡単なものから、効率の良いフロアヒーター、石油ストーブ、それに近代的な太陽熱利用装置など様々ですが、これらは全て電気の力で働いているのです。

反対にペンギンなど極地の動物は暑さが苦手で、気温が20℃以上になると冷房してやらねばなりません。これも電気によりルームクーラーを働かして部屋の中を冷房しています。

王子動物園の月別消費電力量をグラフにすると下図のようになります。最も電気を使うのが

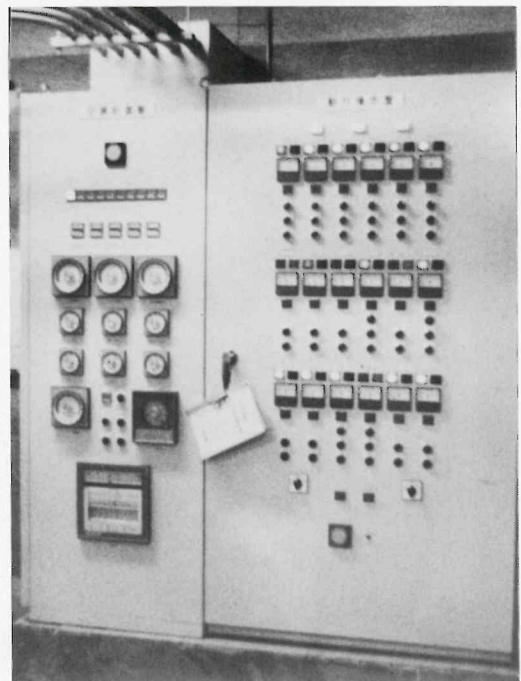


月別電気使用量のグラフ

冬で、もちろん暖房用です。1日で普通の家庭の200軒分くらいの電気を消費してしまいます。これだけ大量の電気を使用していると安全対策も大変です。

電気器具が過熱や漏電しないように、絶えず気を配って点検しなければなりません。

一番困るのは不時の停電です。暖房が急に止まって動物たちが寒さにふるえていた事もありました。又、冷蔵庫や冷凍庫も止まり、エサが変質するおそれもあります。動物と電気は切っても切れない関係があり、その他動物飼育だけでなく、近代化する動物園ではあらゆる施設が電化されてきました。園内では絶対に停電のないようにするのが私のつとめです。勤務時間外でも、心の安まる暇もありません。公休日でも行く先を必らず知らせておくよう心掛けていますし、特に台風や、雷の日などはまっさきに出務するようにしています。かわいい王子の動物たちのために、頑張っています。(福永邦宏)



▲太陽の動物舎の配電盤

おかあさんといっしょ…



▲シベリア・トラ (57.11.3.生)

▼グレービ・シマウマ (57.12.1.生)



かわいいこどもたち……



▲アカ・カンガルー (57.5.ごろ生)

▼カバ (58.2.4.生)



(撮影：福田元二)

動物育児日記

◆シロカケイ（白火鶏）のひな誕生記



中国・天津市から親善動物交換でやって来た、シロカケイに、昨年かわいい3羽のヒナが生まれました。この鳥は中国が原産地で、それも海拔3,000mもある高山に生息している、珍しいキジ科の鳥です。この鳥を飼育してみると「オス」は気性が激しく、毎日の清掃の時にはきまって攻撃してきます。それに対して、「メス」はおとなしくよく慣れています。今回が始めての産卵ですが、どうしたことか、卵を生んでも落ち着きが見られず、卵を抱こうとしないのです。そこで、なんとか卵を抱かせようと、巣箱、樹木等を舎内に植え、隠れ場所を設けてやったのですが、「後はたのんだよ……。」と言った調子で抱こうとしません。何とかヒナをかえそうといろいろ考えた末、違う鳥に卵を抱かせることを思いつきました。

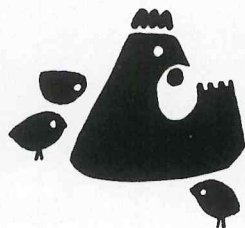
“^{かひ}仮母シロウコッケイに^{なご}託卵”

鳥の中でも、抱卵、育雛にかけてはNo.1と言ってもいいぐらい上手なシロウコッケイが^{まご}巣ごもりしていたので抱かすことにしました。仮母は自分の生んだ卵のように熱心に卵を抱き、23日目の昼ごろ無事3羽の「ヒナ」がフ化したの

でした。「ヒナ」は全体が薄い褐色で胸部から頸部にかけて黄色があった線があり、動物性のえさが好きで、ミルワームと言う虫を奪い合って食べます。翼は5日ごろから生え始め、全部のはねが生え揃うのに95日かかりました。「ヒナ」は最初に見る仮母の行動を見まねをしてその環境

に次第に慣れて行くものですが、成長するにつれて全く知らない生みの親鳥の行動をするではありませんか。それと言うのも、シロカケイは土の中の昆虫を常食しているために地面を深く掘り起こす習性があるのです。その行動を見た時、本能的とはいえ不思議ささえ感じました。仮母より体格が大きくなったころ、ヒナの1羽が突然仮母を攻撃したのです。その行為も「オス」親鳥とまったく同じ行動をするのでした。しかたなく、仮母を分け「ヒナ」だけにすると、こんどは逆にこわがりだし逃げ回るので。そんなある日、「ヒナ鳥」をそっと生みの親鳥の隣室に移して見ましたが、親子が鳴きながら仕切り金網越しに寄り添う姿を見た瞬間、やはり、この鳥は自分の種族を忘れていなかったことを知りました。

(鈴木 忠)



◆日本で最初のシベリア・トラ

トラはアジア原産の動物で、7種に分かれますが、寒い地方ほど大型で毛が長くなりますが、最も大きな体格の持主がシベリアトラです。このトラを日本で最初に飼育したのが王子動物園で、昭和51年にアメリカのサンディエゴ動物園からオスの「サーナー」が、翌52年にカナダのトロント動物園からメスの「ナディア」が親善動物としてやって来ました。どちらも、幼いころから人工で育てられたため人によく慣れ、性質もおとなしく、2頭共すぐに仲良くなり、やがて7カ月後には3頭のかわいい赤ちゃんが生まれました。妊娠期間は約3カ月です。もち論、この赤ちゃんはシベリアトラの日本で最初の誕生でした。

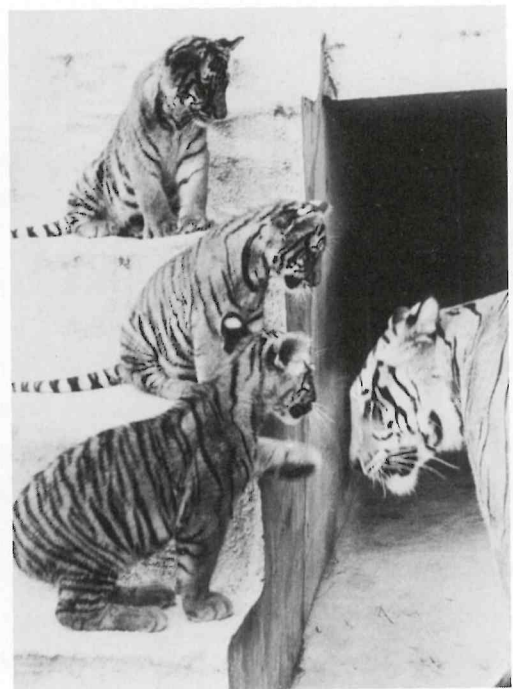
ところが、母親の「ナディア」は乳の出が悪く、一生懸命育てているのですが赤ちゃんは母乳が少ないので衰弱し、2頭は間もなく死に、1頭のオスだけになり、これもこのままでは死ぬ恐れがあるため、4日目に親から離し、人工で育てることになりました。保育器に入れ、電気アンカで温度を保ち、人の赤ちゃん用のほ乳びんでミルクを3～4時間ごとに飲ませる毎日が続きました。それに大変なのは“うんち”をさせることです。トラの母親は肛門の周りを舌でなめ、刺戟させて“うんち”をさせますが、舌の代りに温めた綿花で肛門の回りをマッサージしてやるなど苦勞の多いものでした。

2カ月ぐらいで離乳食に変え、ミンチ肉や小さな肉片を与え、次第に量を増やします。そのころになると、猫のようにじゃれつき始め、天気の良い日には園内を散歩させるのですが、見えるものが全て珍らしく、ハトを追ったり、物をくわえたり、そのかわいい仕草は入園者を喜ばせたものです。六甲山にちなみ「ロク」と名付けましたが、今は北海道の帯広動物園で元気に暮しています。

2度目の出産からは母親が育てるようになり、安心して見守ることができました。今までに8度出産し、20頭の赤ちゃんが生まれましたが、死

産も多く、順調に育ったものは8頭で、飼育の難しさがよく判ります。順調に育った子供たちは北海道から九州まで養子に行きましたが、7度目に生れた「トミー」と最近生れた「十五郎」が入園者の人気を集めています。なお、これらのシベリアトラは国際登録された血統書付きです。
(福田元二)

王子動物園 シベリアトラの系図	
♂ロク	1977. 9. 29生 帯広動物園、人工保育 ♀2頭 死(生存1日)
♀ナナ	1978. 6. 4生 旭川動物園
♂ハチ	死 148日生存
♀キコウ	京都動物園
サーナー 父 1973. 12 生 アメリカ、サンディエゴ動物園 1976. 8 来園	
ナディア 母 1972. 3 生 西ドイツ、ハーゲンバック →カナダ、トロント動物園 1977. 2 来園	
♀トコ	1979. 3生 人工保育、熊本動物園 3頭死産
♀トイチ	1979. 7. 20生 死 74日生存
♀マミー	1980. 5. 14生 帯広動物園
♂2	1981. 6. 23生 死産
♀トミー	1981. 10. 31生 在園
♀トシ	多摩動物園
♂1 ♀1	死産
♂十五郎	1982. 11. 3生 在園
♀1	死産 ♀1 死(生存2日)





動物なぜなぜ問答



◆チンパンジーやオランウータンの爪は人のように切ってやるのですか？

ほとんどですね。長くのびたのを見たことがありません。それでもものびないのではなくかなり早くのびています。

チンパンジーの人工飼育で、1カ月に3mm位のびていることが分りました。

それでも切らなくとも何時もきれいな爪つめをしています。

何故でしょう！よく見ると、歩くとき、走るとき、木にのぼるとき、人間よりは指先をたいへんよく使っているのです。それに柔かく分厚い爪で、すき間がないのも逆爪をおこさないようですね。

このように柔い爪つめなので切らなくとも自然にすりへっていくのです。それでも、あまり激しく運動をすると指先から血を出していることもあって、冬にはそこからヒビ割れをよくおこしています。

一方、キリンやシマウマのヒツメはどうしても運動量の少ない動物園では、のびすぎたり、爪つめに変形がおこったりします。そこで削蹄具（爪切道具）で整形してやらねばなりません。

そうした時に動物たちには身体に触れようが、足をもとうが、じっとしている、そのような躰しづを常にしておくことも飼育係の大切な仕事のひとつでもあるのです。

また、爪つめののびすぎを防ぐために運動場を砂地にしたり、小さなジャリを敷きつめたりもしています。

（亀井一成）



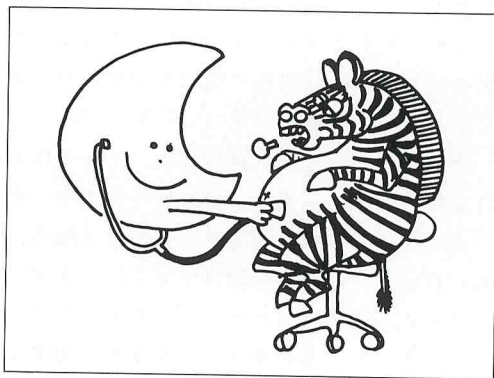
◆動物園の助産婦さんはだーれ？

「動物が子供を産む時には、飼育係の人や獣医さんが手助けをするの？」「とんでもない。そんな時に人間が近づいたら、かえって動物のじゃまになるやろ。だいたい、動物園にいる野性動物は、誰れにも見られんよう夜の暗い間か、物かげに隠れて出産するのが普通や。」「そやけど、うちの犬は子供産む時、手伝うてやらないかんよ。」「そこが、家で飼うペットと野生動物のちやうとこや。自然の草原やジャングルの中には、生まれてきた子供を餌にして食べたろ思うやつが、ぎょうさんいてるさかい用心せなあかんねん。」

「そしたら、ほったらかし？」「そうや。けどな、人間と同じように動物にも『難産』ゆうのがあるねん。子供がお母さんのお腹の中でひっかかって出てこれんようになったり、頭から出てこなあかんのにお尻の方から出てきたり……。そんな時にはな、ちょっとだけ手伝うたんねん。あつ、それとなお月さんや！」「なんなん、それ？」「あんな、動物が子供生む時は、満月の夜が多いねん。去年はシマウマとキリンがそうやった。それにトカラウマもや。お月さんの引力が、お産と関係あるのかも知れへんな。」

「そしたら、動物園ではお月さんが助産婦さんやね。」「そやそや。」

（村田浩一）



動物もの知り手帳

～なんでも知っちゃお!～

◆つの(角)のお話 <その1>

皆さん、動物園で“つの”を持っている動物はどんな仲間がいるか知っていますか?、まず最初に思い浮かぶのは“しか”でしょうね。

鹿の立派な角はオスだけが持っていて、メスにはありませんね。それから春になるとこの角は自然に取れてしまうことも知っているでしょう。

さあて、牛や山羊はどうかしら……、これらはオスもメスも角を持っていますね。“さい”は太くて大きな角が顔のまん中にニョッキリと突きだしていますね。“きりん”には角があるでしょうか?、なにか頭のてっぺんに二本突き出て上に毛がふさふさしたのがありますね。これは鹿の角のように見えませんが、やはり角なのです。ここで、それぞれの角の特徴を少しお話ししてみましょう。

鹿の仲間ではオスだけに枝分かれした枝角といわれる大きな角があります。この角は毎年、繁殖期になると落ちてしまい、再び新しい角が生えてきます。日本鹿ですと、4月から6月ごろに脱落してしまいます。王子動物園にいるめずらしい“しふぞう”(四不像)という中国原産の鹿は11月ごろに角が脱落しますので、日本鹿とは時期が少しちがいますね。

新しい角が生えるとき、初めは皮膚がふくれて、こぶ状のものからどんどん生長していくのです。表面はやわらかく、これを袋角といいますが、中は血液が多く、石灰分をどんどん送り込んで骨質の硬い角を作っていくのです。

この袋角がのびきって、枝角の形ができるころ、表面の皮膚が取れて、本当の角がみえてきます。血液でよごれた白色の角がみえるころに、お客さんから、“鹿が傷して血を出していますよ!”との連絡があるのですが、これは普通の現象ですので、ご安心下さい。

この他に袋角の役割は外気温と敏感に反応して袋角の表面温度を変化させていますが、袋角の静脈は脳の血管と連絡していることから、脳の温度を一定に保つ重要な働きもしているといわれています。

次の機会には牛やさいの角のお話しをしましょう。

(権藤真禎)



▲シフゾウの袋角

・上：はえはじめ　・下：2カ月後

トピックス (57年7月～58年1月)

◆第12回サマースクール開催

恒例のサマースクールが7月26日から8月3日まで園内で開かれました。今回で12回目。参加希望者が多く、今回も抽選で約500名の小学生が受講しました。今回のテーマは「ゴリラ」と「カンガルー」で飼育係員の話や映画、そして、実際に動物を見ながら熱心に勉強をしました。又、今回は付添いの保護者対象の講義もおこないました。

◆リガ市動物園へ「ニホンザル」を贈る

神戸市の友好都市であるソ連・ラトビア共和国のリガ市へ、東京都多摩動物公園で生れた「ニホンザル」4頭(オス2、メス2)を譲り受けて、7月31日に成田空港を出発した「神戸市選抜友好柔道団」に託して、リガ市動物園へ贈りました。これは3年前に当園へ贈呈された「ヨーロッパ・ビーバー」のお返しとして贈ったものです。

◆キリン「長男」の最後の子ども生れる。

6月12日急死したキリンのオス「長男」の24頭目の子ども(オス)が9月1日元気に生まれました。亡き「長男」とっては最後の子どもで「長男」のように立派に成長するよう「長男2世」と名付けました。



▲「長男」の子供たち

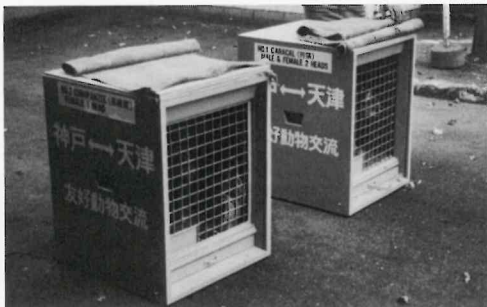
◆異人館「旧ハンター邸」内部公開

園内にある国指定重要文化財「旧ハンター邸」の内部を、4月、8月、10月の3回、それぞれ1カ月間、一般公開しました。公開中はフレッシュな異人館ガールが案内につとめたほか、邸内の壁面を利用して、神戸の風景を描いた水彩画展や動物の切手展を開き、好評でした。



◆中国・天津動物園へ友好動物を贈る

中国の天津市にある天津動物園とは6年前から友好の動物交流をおこない、日中友好に大きな役割を果たしていますが、第3次の交流として、11月15日に大阪空港から「ピューマ」「カラカル」の子ども各1対と「チンパンジー」のメス1頭を天津動物園へ贈りました。この輸送には山神園長と三角飼育員が随行し、天津のほか、北京、西安、上海の各動物園を巡り、技術交流をおこないました。



◆“い年”、版画コンクール開催

王子動物園と神戸新聞社との共催により、恒例の版画コンクールをおこないました。今回のテーマは「イノシシ」。幼稚園児から大人まで2257通の応募があり、版画家の川西祐三郎先生の審査により特別賞、金賞、銀賞 137点を選び12月21日から1月末まで大丸神戸店、王子動物園、須磨区民センターで展示しました。又、1月16日には入賞者の表彰式を王子動物園でおこないました。

◆動物の“ヒップ”、写真展開く

12月1日から1カ月間、“さんちか”のアド・ウィンドウで動物の写真展を開きました。今回は“うしろから見た動物”というテーマで、ゾウ、サイ、カバ、パンダなど11種の動物のヒップの写真を切抜いて展示し、道行く人たちの興味を引きました。又、動物当てクイズもおこない、正解者の中から抽選で10名の方に「パンダ滞在記」の本を贈呈しました。(谷岡正之)



「パンダ滞在記」好評発売中

昭和56年3月から9月まで神戸ポートアイランドで開催されたポートピア'81の最大の人気者であったジャイアント・パンダの飼育記録が王子動物園と博覧会協会との共同編集により「パンダ滞在記」として出版し、好評を得ています。パンダのかわいい写真やおもしろいイラスト、パンダの素顔や飼育の苦労話などが満載され、子どもから大人まで楽しめる本です。ぜひ、ご一読をおすすめします。王子動物園の売店で発売中。B6版 204ページ 980円。





い年…版画コンクール特別賞入選作品

編集後記

今年の冬は例年になく暖かきで、南国育ちの多い動物たちも大いに喜んでいて
 思います。やがて、春になるとベビーラッシュを迎え動物園のにぎやかな季節がや
 って来ます。昨年は、天津市やりガ市へ動物を贈り、又、天津から動物がやって来
 ました。国際都市神戸らしく動物園も国際的になって参りました。58年も話題の多
 い年になりそうで、この“はばたき”もこれらの話題を入れて充実いたしたいと編
 集スタッフ一同張りきっています。 (編集室)

はばたき 第13号

昭和58年2月25日 発行

編集：神戸市立王子動物園

発行：神戸王子動物園協会
 神戸市灘区王子町3丁目1

1部 100円

83021500